

日本女子大學校一覽



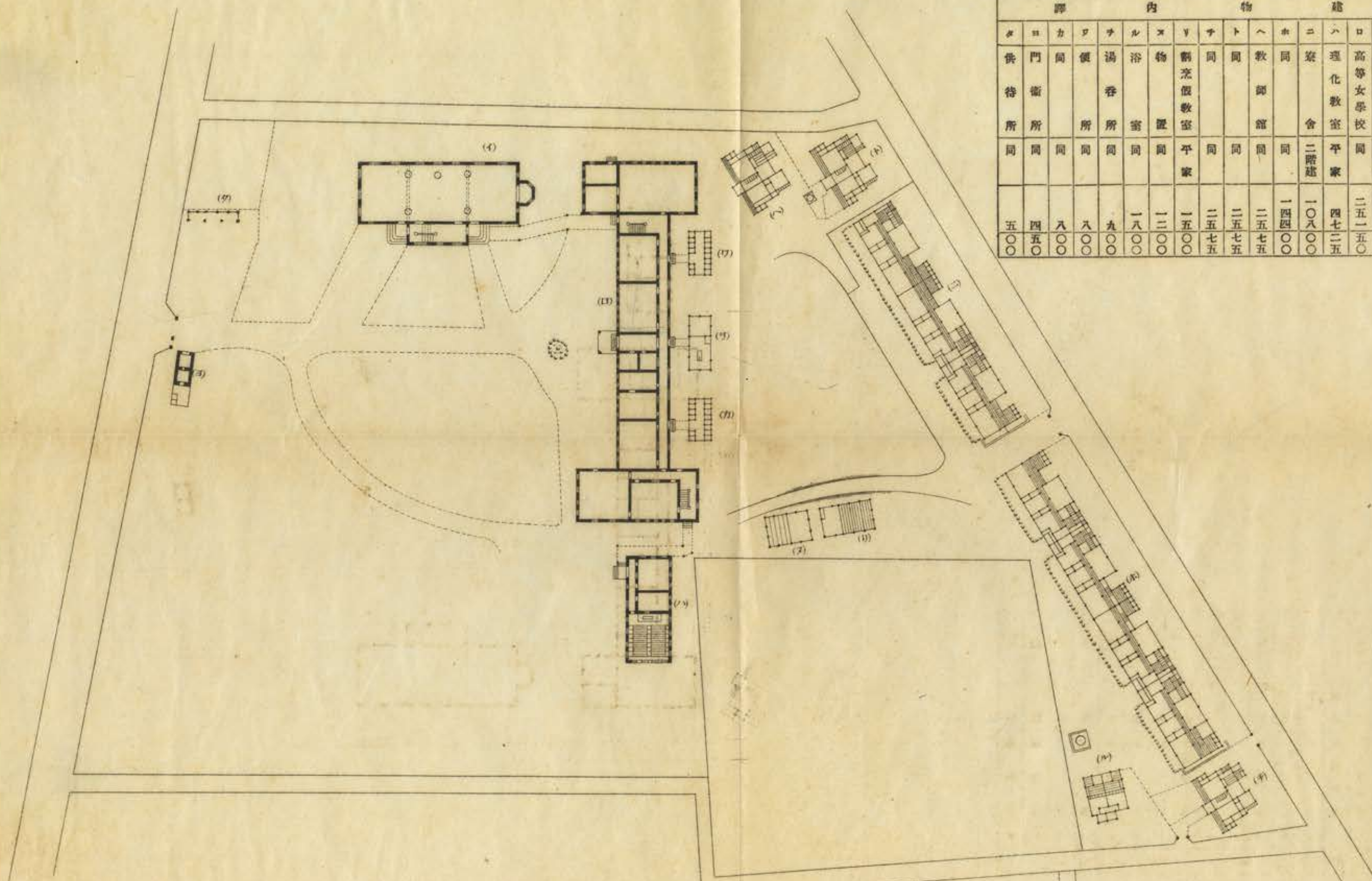
日本女子大學校

東京市小石川區高田
豊川町十八番地

敷地 五千五百二十坪五合

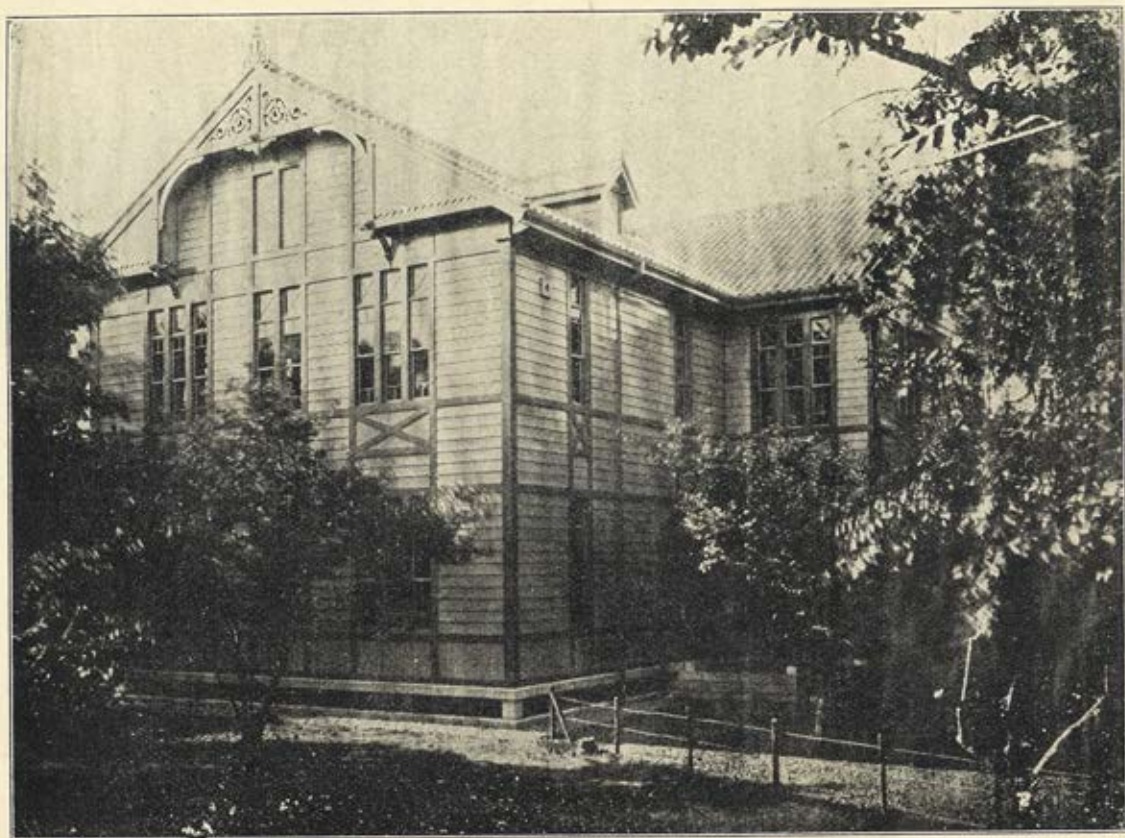
建物 八百二十三坪八合九勺

建 物 内 容												
イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	ヲ	カ
大學部(一部分)	高等女學校	理化教室	寮舍	同	教 師 館	同	同	同	同	物 置	浴 室	湯 呑 所
二階建	同	平家	二階建	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一六三九	二五一五〇	四七二五	一〇八〇〇	一四四〇〇	二五七五	二五七五	二五七五	一五〇〇	一二〇〇	一八〇〇	九〇〇	八〇〇
五〇〇	四五〇	八〇〇	八〇〇	五〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇



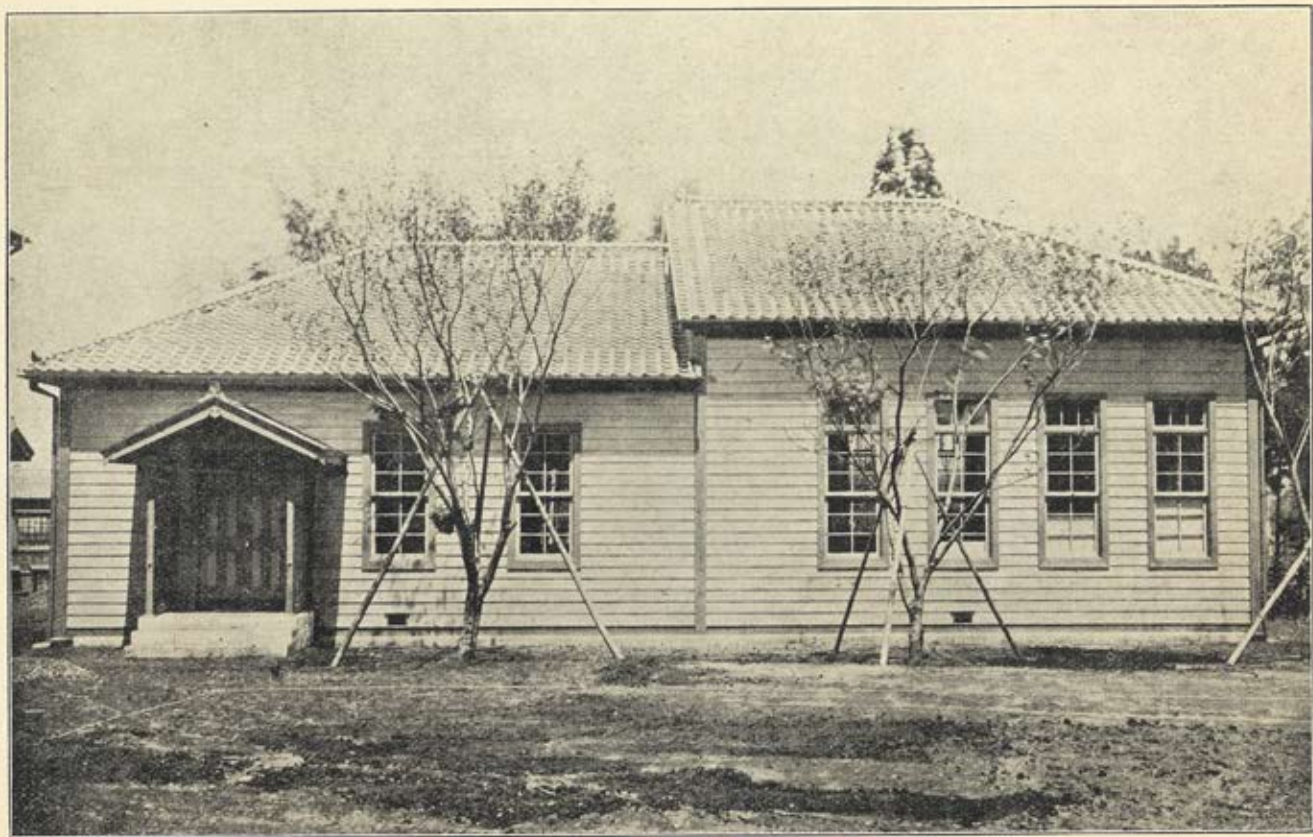


舍 校



舍

校

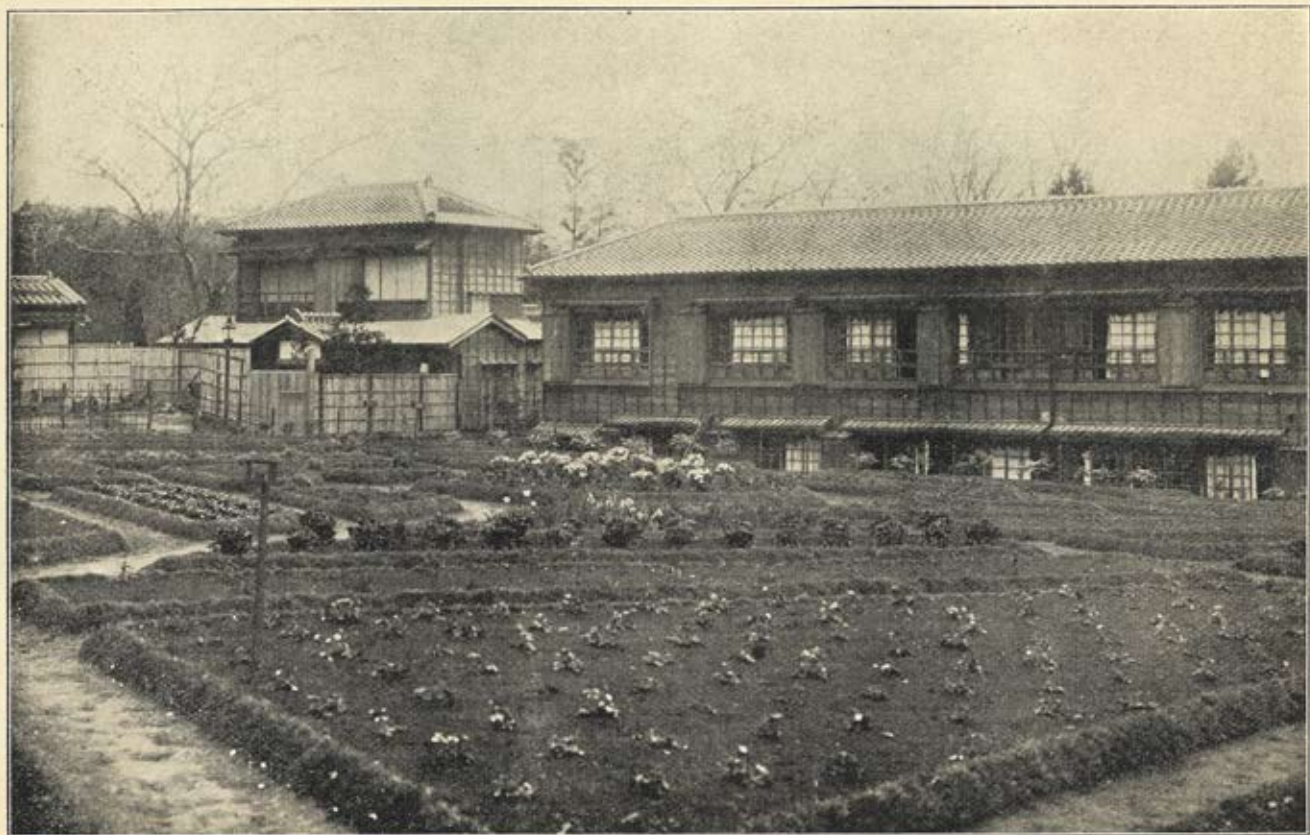


室 教 科 理



舍

寮



園 花



徒生員職校學大子女本日



附屬高等女學校職員生徒

日本女子大學校一覽

◎方針 本校教育上の方針は、女子を人として、婦人として國民としての、三方面より教育するに在り。

◎人としての教育 第一、本校が之を器械視せず、藝人視せず、單に眼前實用の學藝のみを授けずして、人間として當然具備すべき心身上の能力を啓發開展し、如何なる境遇に處し如何なる職業に従ふも、缺くべからざる人格を養はしむるは、是れ人としての本分を盡さしめんとすればなり。

◎婦人としての教育 第二、婦人には婦人として特別に修むべき徳あり、磨くべき知あり、備ふべき藝あるが故に、凡て此等の婦人に必要なる智徳藝能を授け、以て賢母たり良妻たらしむるは、是れ女子として盡すべき天職を全うせしめんが爲なり。

◎國民としての教育 第三に、國民たるの觀念を與へ、社會の一員たることを自覺せしめ、以て日本婦人としての特性を備へしむるは、是れ國家社會に對し、國民としての女子の義務を盡さしめんとすればなり。本校は如上の主義實行の方法として第一

◎開發主義 の教育を施し、生徒をして自ら研究し工夫し動作する習慣を養はしめ、漫に他人を模倣し、教師に依頼するの弊に陥ることなく、徒に博識多能ならんよりは

寧ろ事物の真相關係を辨知し、藝術の原則妙理を會得するに必要なる智力を練磨し、他日卒業の後に於て萬般の事物に接して永く効力を有し、應用自在ならんことを期す。殊に德育に於ては自奮自脩、他の指揮を待たず、進んで各自の職を盡すの良習を養成せしめんとす。

◎特性の發育 第二は、生徒各自の特性に適合する教育を施すに在り、才に適不適あり、即ち必修選修兩科を併置して、學科科目撰擇の自由を與へ、體質に強と弱とあり、即ち室内に戸外に、種々の裝置を備へて、各、自適の運動を撰はしむ、徳性又其習慣氣質を異にする所あり、即ち又適宜の訓戒獎勵を與へて、其品格の陶冶を計るなり、尙此外に◎本校の特色 とせんとする所のもの一あり、即ち万事に於て、本校は一方には官公立學校の長所を採り、一方には私立學校の短所を棄て、形式に流れず、又不規律に陥らず、善く形式と精神とをして、調和融合せしめんことを期する是なり。

◎創業の發端 本校創立の發表は、正に明治二十九年に在り、時の總理大臣伊藤侯西園寺侯大隈伯内海男北島男等、主として熱心なる賛意を表せられ、殊に大和の土倉庄三郎氏と大阪の廣岡淺子は、募金費を擔任して、大に力を假されたり、此際

◎發起人 たることを快諾せられし方々は、左の如し。

侯爵夫人 伊藤 梅子 公 爵岩 倉 具定

男爵夫人 岩崎早苗子

市島德次郎

磯野 小右衛門

侯爵夫人 蜂須賀隨子

原 六郎

濱岡章子

時任 爲基

土居通夫

殿村 平右衛門

土倉壽子

大西五一郎

侯爵夫人 大山捨松子

伯爵夫人 大隈 綾子

大倉德子

伯爵夫人 樺山登茂子

川崎芳太郎

子爵夫人 高島 春子

田中市兵衛

田村太兵衛

田邊貞吉

成瀬 仁藏

村山龍平

男爵夫人 内海千代子

浮田桂造

右近 權左衛門

野崎武吉郎

男爵 九鬼 隆一

男爵夫人 山田清子

藪田勘兵衛

伯爵夫人 松方政子

松本 濱子

前川 慎造

公爵夫人 近衛 貞子

鴻池新十郎

鴻池 善右衛門

芦田順三郎

侯爵 西園寺公望

菊池 侃二

男爵夫人 北島三枝子

木原忠兵衛

男爵 三井八郎右衛門

三井 捨子

男爵夫人 澁澤 兼子

芝川 又右衛門

澁川忠次郎

伯爵 土方久元

廣瀬 宰平

廣海二三郎

廣岡 久右衛門

廣岡 淺子

森村 市左衛門

周布貞子

砂川雄峻

住友 吉左衛門

◎創立委員 翌年四月に開かれたる發起人會の結果として、

伊藤徳三

男

爵 岩崎彌之助

磯野 小右衛門

稻垣滿次郎

侯 爵

蜂須賀茂韶

原 六郎

濱岡光哲

土倉庄三郎

伯 爵

大隈重信

大三輪 長兵衛

大倉喜八郎

子

爵 岡部長職

川崎芳太郎

嘉納治五郎

高崎親章

田中源太郎

田中市兵衛

田村太兵衛

辻 新次

成瀬仁藏

子 爵

長岡護美

村山龍平

男 爵

内海忠勝

野崎武吉郎

久保田 讓

山本達雄

公 爵

近衛篤麿

前川楨藏

侯 爵

淺野總一郎

兒島惟謙

西園寺公望

北島治房

菊池 侃二

三井高保

三井三郎助

澁澤榮一

廣岡信五郎

土方久元

工學博士

平賀義美

森村 市左衛門

住友 吉左衛門

の諸氏創立委員となられ委員長には近衛公を推せしむ、公は職務多端の故を以て大隈伯に譲られ伯即ち之に當

られ、

◎會計監督 には男爵澁澤榮一住友吉左衛門の兩氏之に擧げられ又

◎教務委員 は近衛公爵西園寺侯爵蜂須賀侯爵大隈伯爵内海男爵澁澤男爵久保田讓氏の七氏と定りたり、次て

◎創立委員の内より代表者 を撰ひ、弘く寄附金依頼狀を配布し、又東京と大阪とに於て朝野の名士を招待し、設立の主旨を披露せしかば、

◎賛助員 も漸く増加して七百餘名となり、事將に緒に就かんとせし時に方り、不幸にも經濟界の不振に遭遇し、一時

◎資金の募集 を中止するの已むなきに至りしも、女子教育は國家の最大急務にして、其効果は一朝一夕に收め得べきにあらざれば、即ち奮然万難を排して着々募金の歩を進めしに、幸にして大方の同情を得て、陸續寄送せらるゝ所あり、終に豫定額三十万圓の半に達するを得たり、かくて明治三十三年九月、創立委員會を催ふして、愈、設立着手に決し、

◎建築委員 として、男爵岩崎彌之助久保田讓兒島惟謙三井三郎助男爵澁澤榮一住友吉左衛門の六氏は擧げられ、文部技師久留正道氏は、好意を以て設計監督の任に當られ、茲に本校々舎理科教室各一棟、教師館三棟、寮舎二棟、浴室一棟、門衛舎一棟、計六百七十五坪餘の建物は、三十四

年四月中旬を以て、三井家寄附の五千四百坪の地に建られ、直に開校式を擧ぐるに至りたり。

◎位置 目白臺の中央、細川邸に隣り、樺山邸に對する處、鬱蒼たる古樹の其四方を繞くるもの、之を日本女子大學校とす。地高く水清く、氣新に境閑なり。門を入れれば幾株の老櫻、路の左右に並ひ、巍々たる灰白色の

◎校舎 兩翼を張て其前に横はる、之を附屬高等女學校の教室とす。大學部教室の敷地は其前方にして、其右翼に當る一部は工事正に落成せり。廊下を以て高等女學校教室の東に列るものを、理科教室とす。これは岩崎久彌男の寄附なり。兩舎の間を北すれば、二個の教師館に狹まれて、二層樓の寮舎の東西に亘れるを見る。此寮舎と校舎との間に、一大

◎花園 あり。大隈伯の寄附に係る。圓形の花壇を中心として、幾多扇形の花壇之を繞り、其間縦横に小徑を通す。異花爛熳、珍卉馥郁、花朝月夕、其間に逍遙す、清快それ幾干ぞ。

◎入學者 頻々 建築已に成りて、未だ募集の廣告を公にせず。然るに入學志願者早く已に定員を超過し、已むなく入學を謝絶せし者、幾百の多きに上りしは、實に豫想外のことにして、又以て社會が女子の高等教育を渴望する一斑を伺ふに足るべし。

◎皇室の恩賜 殊に昨年九月二十五日には、畏しこくも我仁慈なる。

皇后陛下 は、本校の設立を聞召され、金二千圓を下賜せられたり、是れ實に本校無上の光榮にして、本校が日夜感泣鴻恩の萬一に答へんと奮勵措く能はざる所のものなり。

◎江湖の同情 皇室の藩屏たる華族方の寄附又少からず、今其五百圓以上のものを舉ぐれば

一、〇〇〇圓 公爵 岩倉 具定 五〇〇圓 公爵 近衛 篤麿

一、〇〇〇圓 公爵 島津 忠濟 五〇〇圓 侯爵 伊藤 博文

一、〇〇〇圓 侯爵 蜂須賀茂韶 五〇〇圓 侯爵 徳大寺實則

五〇〇圓 侯爵 伊達 宗徳 五〇〇圓 侯爵 山縣 有朋

一、〇〇〇圓 侯爵 前田 利爲 五〇〇圓 侯爵 西園寺公望

一、五〇〇圓 伯爵 大隈 重信 五〇〇圓 伯爵夫人大隈綾子

五〇〇圓 伯爵 松方 正義 五〇〇圓 伯爵 酒井 忠道

五〇〇圓 伯爵 土方 久元 五〇〇圓 子爵 岡部 長職

五〇〇圓 子爵 秋元 興朝 一〇、〇〇〇圓 男爵 岩崎彌之助

五、〇〇〇圓 男爵 岩崎 久彌 五〇〇圓 男爵 内海 忠勝

一、〇〇〇圓 男爵 北畠 治房 三井家總代

三、五〇〇圓 男爵 渡澤 榮一 三、四八圓男爵三井八郎右衛門

諸家の如き已に多額の金員を寄附せられ、其他將に翼賛の意を表せられんとする者も、亦少なからず、民間紳士の、已に寄附せられ又將に寄附せられんとする者、其數又頗る多し、今其五百圓以上の者を左に舉げんに、

一、〇〇〇圓 磯野 小右衛門 五〇〇圓 岩 谷 松 平

五〇〇圓	服部金太郎	一、〇〇〇圓	原六郎
五〇〇圓	濱岡光哲	三、〇〇〇圓	殿村平右衛門
五、〇〇〇圓	土倉庄三郎	五〇〇圓	大家七平
一、〇〇〇圓	川崎正藏	五〇〇圓	田中市兵衛
五〇〇圓	玉木善作	五〇〇圓	辻新次
五〇〇圓	成瀬仁藏	五、〇〇〇圓	村井吉兵衛
一、〇〇〇圓	村山龍平	五〇〇圓	右近權左衛門
五〇〇圓	八尾新助	一、〇〇〇圓	松本重太郎
三、五〇〇圓	古河市兵衛	五、〇〇〇圓	鴻池善右衛門
一、〇〇〇圓	淺野總一郎	五〇〇圓	麻生正藏
一、〇〇〇圓	三井捨子	二、〇〇〇圓	芝川又右衛門
五〇〇圓	<small>清水滿之助 同釘首</small>	一、〇〇〇圓	廣岡久右衛門
五、〇〇〇圓	廣岡信五郎	五〇〇圓	廣海二三郎
五〇〇圓	廣瀬幸平	一、〇〇〇圓	森村市左衛門
一〇、〇〇〇圓	住友吉左衛門		

◎社會の注目 且又開校以來日尙淺きも内外の貴紳朝野の名士將た又都部の教育家の態來りて參觀を求めらるゝもの殆んど虚日なし、本校が大に社會の注意を惹けることは又蔽ふ能はざるなり。

◎大學部 目下本校は家政國文英文の三學部を置けり。生徒の數は家政學部に百八十三名國文學部に百四十七名英文學部に七十九名合計四百九名なり。年齢は少きは十八歳より三十歳前後まで區々にして一定せずと雖も

廿歳前後のもの最も多きに居る、又資産上より言へば中等以上の家庭より來り學ぶ者十中八九を占むと雖も或は寮婢となりて庖厨の役に服し、又は牛乳を配達しつゝ、修學する苦學生あり、眞摯篤學の學生に乏しからず。

◎家政學部 開校以來此一年間に教鞭を取られたる人々は、家政學部に於ては、生理に醫學博士大澤謙二氏、及理學博士渡瀬庄三郎氏、衛生に醫學博士三宅秀氏、應用理化に理學博士長井長義氏、日本禮法に小笠原清務氏、日本料理に赤堀峰吉氏、西洋料理にミセス、ブラッドベリ、及山崎武八郎氏、西洋裁縫に長井博士夫人、各熱心に之に當られ、茶道は松浦伯監督の下に、松浦恒氏之を授けられ、生花は、見島晚翠氏之に任せられ。

◎國文學部 に於ては、關根正直、文學士鹽井正男、吉田彌平、戸川安宅四氏の國文に於ける、中島歌子及三宅龍子の和歌及書法に於ける、市村瓊治郎氏の漢文學に於ける、三輪田眞佐子の漢文作文に於ける、文學博士萩野由之氏、及文學士岡部精一氏の國史に於ける、文學博士小杉樞郎氏の有職故實に於ける、いづれも専門の良教授を得。

◎英文學部 に於ては、村井知至氏を始め、ミセス、レナー、ミスクリー、ン、ミセス、ケラー、ミス、エモルソン、及河瀬文子、英文學英語及作文を教授せられ、松浦政泰氏は譯解と翻譯を擔任せられ、農學士柳井道民氏は譯解會話作文を教授せられ、浮田和民氏は西洋歴史を講せらる、又此度同

學部は、英米女子大學の制度を参照し、學課課程を制定せしが、從來の英語教授とは聊か趣を異にする所もあり、ミスヒウス、ミセス、アズバン、及ミス、フイリアスの三氏も教授を分擔せらる、此外

◎三學部共通の學科 には、成瀬校長の實踐倫理あり、麻生學監の倫理心理あり、湯本武比古氏の教育學あり、川端玉章松井昇兩氏の繪畫あり、白井規矩郎平野はま子川瀬富美子三氏の幹操あり、尙大學部の二年三年に於ては、井上頼圀氏の國文學、高島平三郎氏の兒童研究、文學博士木村正辭氏の國文學、篠田利英氏の教育學及教授法等ある筈なり。

◎科外講演 は土曜日の午後を開かる、已に講せられ又將に講せられんとする講師の方々は、文學博士井上哲次郎氏、男爵神田乃武氏、高等師範學校長嘉納治五郎氏、藥學博士田原良純氏、文學博士坪内雄藏氏、文學博士上田萬年氏、醫學博士青山胤通氏、文學博士三上參次氏等なり。

◎高等女學校 は五年四年三年の三級は各東西に分れ、一年二年は各一級宛にして、合計八學級、生徒三百九十八人を有す、之に三大學部の生徒四百九名を合して、總計八百七名之を本校現時在學の生徒とす、今其府縣別を左に掲ぐ、

日本女子大學校在學生徒數府縣別調

(明治卅五年五月十五日現在)

府	縣	大學部	英	文高	等	合計	府	縣	大學部	英	文高	等	合計
		障		科女	學校				障		科女	學校	

岩手	福島	宮城	長野	岐阜	滋賀	山梨	静岡	愛知	三重	奈良	栃木	茨城	千葉	群馬	埼玉	新潟	長崎	兵庫	神奈川	大阪	京都	東京
八	一〇	一八	二一	三	三	一	一〇	八	四	三	一二	九	八	九	九	一一	四	一二	四	一一	八	三〇
二	〇	〇	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	二	二	四	二	〇	二	〇	二	二	〇	〇	六
七	一〇	九	一六	二	三	二	二	五	三	一	一〇	一五	二〇	七	一七	六	四	七	一一	八	七	一三
一七	二〇	二七	三八	六	六	三	三一	一三	七	五	二四	二六	三三	一三	二六	一九	八	二一	一七	一九	一五	二五
北海道	鹿児島	宮崎	熊本	佐賀	大分	福岡	高知	愛媛	香川	徳島	和歌山	山口	広島	岡山	鳥根	島取	富山	石川	福井	秋田	山形	青森
八	三	四	一二	一三	四	九	七	一三	八	五	三	一	七	一〇	一	〇	六	三	四	三	一八	一
一	一	〇	一	一	〇	〇	〇	一	一	〇	一	〇	二	二	二	〇	〇	一	〇	一	二	一
一七	八	一	五	二	一	二	四	五	〇	三	三	四	五	二	〇	一	六	三	一一	五	七	〇
二六	一二	五	一八	一六	五	二	一	一九	九	八	七	一五	一四	一四	三	一	一二	七	一五	九	二七	二

合計

五四四五

五六

八〇七

附記 沖繩縣ハ入學生ナン

◎高等女學校の教員 穂積銀子は國語作文及家政を、法貴子、子には歴史及地理を、戸川安宅氏、三輪田眞佐子は國語を、川端玉章、戸田玉秀、兩氏は毛筆書を、富田久子は唱歌及音樂を、小野鷺堂、中村梅太郎、兩氏は習字を、濱田文子、川瀬文子、村井知至、山本春子、松浦政泰氏、ミセスケグー、ミス、エモルソンは英語を、成瀬仁藏、麻生正藏、兩氏は修身を、倉田泰子は國語地理を、松井昇氏は用器書を、佐野とく子は英語及數學を、白井規矩郎氏は躰操及音樂を、平野はま子は理科躰操及英語を、川瀬文子は躰操を、石原咲四手井榮吉田富貴三子は裁縫を、夫れ々々懇篤に教授せらる。

◎躰育 は本邦女子教育の弱點にして、又女子其者に最も欠くべからざる所のものなれば、本校は特に之に重きを置き、室内に戸外に、各種の裝置を備へ、生徒をして各自から喜び勇んで之に當らしむると雖とも、單に校則として躰操を課するのみならず、小にしては一身大にしては一家及社會の躰育及衛生に關しても、各自に注意するの習慣を養はしめんとを期す、今其大畧を記さんには、之を教育躰操、園藝躰操、容儀躰操、及遊戯の四部に大別す、尙少しく、詳記すれば、米國式あり、英國式あり、佛國式即デルサートあり、又表情躰操あり、英國式にはアリス式とハートン式とあり、之に使用する機具の如きも、木環、毬、啞鈴、鈴竿、

シムバー、ブラム、扇子等其數一にして足らず。遊戯に至てはローンテニス(庭球)女子ベースボール、クロツケ、ホツケ、バスケツトボール(籠球)、テザーボール(竿球)、スカーフ(虹霓布晒)其他各種の歐米の新遊戯あり、一々記するに遑あらず。

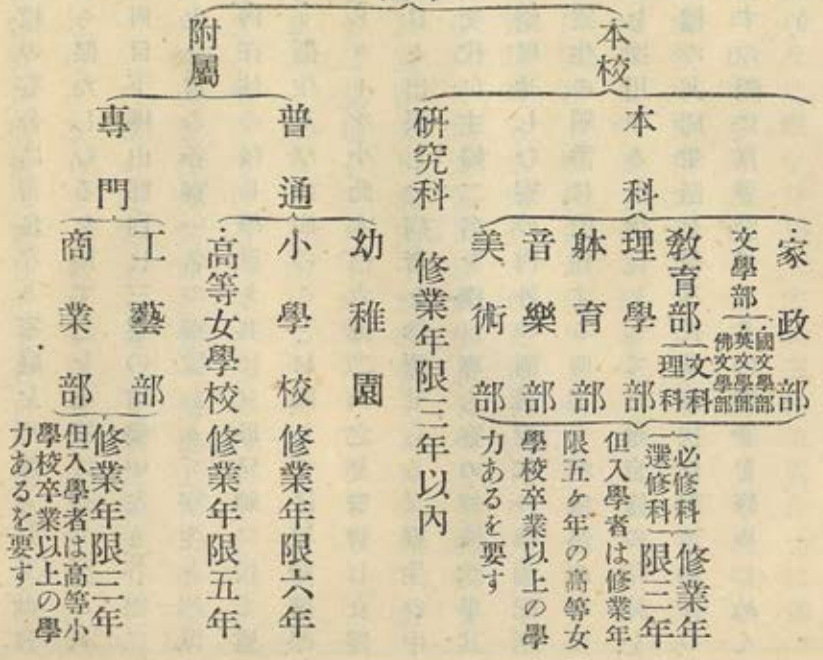
◎寮舎 本校の寮舎は、善良なる家庭を理想とし、又社會との關係をも保たしむるを期す。之を七寮に分ち、外に八九兩寮あり、尙目下樺山邸内に三寮の増築中なり。各寮二十六名の女生を容る。各寮一名の寮監ありて、寮生と起臥を共にし、校内在住の校長學監と共に、父母兄弟に代て監督の任に當り、衛生及び疾病のことに關しては校醫醫學士高田耕安、ドクトル小此木信六郎二氏之を監督し、女醫前田園子は日々出張して病者を診療せらる。又寮生の中より一ヶ月交代に主婦二名を撰ひ、専ら寮の經濟炊事其他の家務を整理せしむ。寮の内外の洒掃、燈火の準備、配膳の用意等、皆寮生の順番に擔任する所なり。本校が此の如く家族制度を採用するは、生徒をして自奮自修の精神を以て、家族同様の共同生活を營み、長幼相扶け、歡苦相分ち、知らず識らずの際に、良妻賢母たるの素養を修めしめんとすればなり。

◎事務所 は塘茂太郎氏主として其任に當られ、安井亮氏山本春子之を助けて、孜孜百般の庶務を辨せらる。

◎將來の計畫 目下本校は、上に家政國文英文の三大學

部を置き、下に附屬高等女學校を設くるに過ぎずと雖も
本校が將來設置せんとする所のものは、實に左表の如し
とす。(●印は既設に屬す)

日本女子 大學校



初等教育あり、中等教育あり、高等教育あり、普通科あり、専門科あり、高低難易相合して、一校を成すものにして、本校の主眼とする所は、首尾の系統整頓せる教育組織を校内に設け、本校が執る所の教育の方針及方法を實施して、淑女たり、良妻たり、賢母たるべき者を養成し、旁ら本邦女子

教育改善の方法を研究實驗せんとするに在り。嗚呼前途
遼遠未設の學科尙少なからず。校舍の建築を要するもの
甚た多し。此等は凡て江湖士女の義捐を待つにあらされ
は實行する能はざる所のものなり。

◎今後の設備　單に建築及び設備の方面を考ふるも、其
實行實に容易ならざるものあり。第一講堂の廣潤にして
數千人を容るべきものなからざるべからず。科外講演の
如き、之を茲に公開して、校外篤志の婦人に其恩惠を分つ、
又可ならずや。次は圖書館なり。大學と圖書館との兩々相
待たざるべからざるものなることは、又多言を要せざる
所殊に女子の爲に公開圖書館を設備するは、本校の如き
が、率先して之に當るべきにあらずや。体育館の設置又甚
た切要なり。音樂館も亦女學校には欠くべからざるもの
なり。嗚呼資金に建築に器械に圖書に標本に、本校か大方
篤志家の義侠的精神に待つ所のもの、決して尠少にあら
ざるなり。内外幾多の紳士淑女よ、幸に女子教育の爲に國
家の爲に、此の帝國最初の女子大學校に、一臂の力を假し
て、之を大成せしめずや。



